

# 家畜の飼育・出荷・食べる体験活動の教育的効果について －総合的な学習の時間における児童の意識の変容から－

吉 崎 露 子\*・松 井 千 鶴子\*\*  
(平成30年8月27日受付；平成30年11月29日受理)

## 要 旨

本研究は、総合的な学習の時間を中核として行われた家畜の飼育・出荷・食べる体験活動の教育的効果について、家畜の命に対する児童の意識の変容から明らかにすることを目的とした事例的研究である。研究1では、家畜の出荷前後の7回の各話し合い後に児童が書いた作文を山崎ら(2006)の生命観カテゴリーを用いて分析した。研究2では、出荷から約1年後に書いた振り返りの作文を同カテゴリーによって分析することで、意識の変容を探った。これらの結果から、およそ継続して出荷に賛成していた児童は、話し合いを重ねる中で生命観を多様にしながら学ぶ傾向があることが明らかとなった。一方で、およそ継続して出荷に反対していた児童は、出荷前後においては家畜の命の「価値」にこだわる傾向があったが、出荷から約1年後には生命観の多様化が見られた。研究3では、出荷から約1年後に、およそ継続して出荷に反対していた児童を対象にインタビューを行い、その内容を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析した。その結果、飼育した家畜の命に対する児童の意識として、【自分たちのレイニーだから命に責任を持ちたい】、【自分たちの総合に対する疑問】、【目的を忘れてレイニーとの楽しい時間を過ごす】、【レイニーの命を自分の命につないでいく】、【レイニーは食べ物ではない】の5つのカテゴリーを生成した。本研究において、出荷について考えることを通して児童が自分らしい生命観をつくり、活動が終了しても自分の生き方について考え続けようとしていることが明らかとなった。

## KEY WORDS

総合的な学習の時間 Periods for Integrated Studies, 体験活動 Experiential activities, 教育的効果 Educational effect, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ Modified Grounded Theory Approach, SCQRM Structure-Construction Qualitative Research Method

## I 問題の所在

中央教育審議会答申(2016)<sup>1)</sup>において、豊かな心や人間性を育てていく観点から、「子供たちが様々な体験活動を通じて、生命の有限性や自然の大切さ、自分の価値を認識しつつ他者と協働することの重要性などを、実感しながら理解できるようにすることは極めて重要」と体験活動の重要性が述べられている。また、体験活動がより充実するために「体系的・継続的な活動を行うことのできる学校の間を生かして、体験活動の機会を確保していくこと」が求められている。体験活動の効果については、独立行政法人国立青少年教育振興機構(2010)<sup>2)</sup>が、「子どものころの体験が豊富な人ほど、規範意識、意欲・関心等が高い傾向にある」ことを報告している。また、国立教育政策研究所<sup>3)</sup>の調査では、自然に触れる体験をすることで、学習意欲を喚起される児童が多いことも明らかになっている。学校で行われる体験活動の中でも、特に、中川(2001)<sup>4)</sup>は、動物飼育について「慈しみ思いやりなどが育つ」「生命を実感する」などの効果があることを教師への調査から明らかにしている。また、立川・田中(2009)<sup>5)</sup>も「動物をかわいがるという親しみや慈しみといった心を育てられる」「生命尊重の精神を育てるのにとっても貢献的」といった効果を挙げている。一方で、中川(2002)<sup>6)</sup>が「飼育期間が長いほど、またより身近な飼育ほど子どもへの影響力が大きい」と述べていることや、多田納(1992)<sup>7)</sup>が「生き物との緊密な接触によって、生命の力強さや不思議さを感じながら育った子どもほど生命を尊重し、生き物を愛護する態度が育ちやすい」としていることから、動物飼育がより効果を発揮するためには、児童が動物を身近に感じながら、継続的にかかわることが必要であることが分かる。小学校における動物の生死にかかわる体験活動については、鳥山(1985)<sup>8)</sup>による「鶏を殺して食べる授業」がある。これは、「殺されていくものが、どんな苦しみ方をしているのか、あるいは、どんなにあっさりとその命を投げ出すのかを体験することで、自分の命、他人の命、生き物の命の尊さに気付かせること」を目的に、4学年の児童を対象に行われた実践である。村井(2001)<sup>9)</sup>は数年後、当時の児童を対象とした聞き取り調査を行い、児童が鶏のと殺を突然見せられたことに

\*宮崎県立都城農業高等学校 \*\*学校教育学系

ショックを受けたり、鶏肉を食べることに抵抗感をもったりしながらも、「人間の存在意義について考えるようになった」「自分の考えを発言できるようになった」などの効果があったと明らかにしている。しかし、こうした実践は有効性が示されながらも、児童の発達特性に配慮する必要性や心理的な影響などが危惧されることも多く、タブー視されがちであった<sup>10)</sup>。そのため、児童が継続的に家畜を飼育し、出荷や肉を食べることを通して命について考える体験活動の教育的効果については、十分に検討されているとは言えない。

## II 目的

総合的な学習の時間を中核として行われた家畜の飼育・出荷・食べる体験活動の教育的効果について、家畜の命に対する児童の意識の変容から明らかにする。そのために、児童の記述した作文から意識の変容を分析するが、研究1では、「レイニー」と名付けられた肉豚(以下、レイニー)の出荷前後に着目し、研究2では、活動終了から約一年後に着目する。そして、研究3では、出荷に反対していた児童がどのように命についての考えをつくっていったのかをインタビューをもとに考察する。なお、教育的効果について、山本(2008)<sup>11)</sup>は「体験前に持っていた意識と体験後の意識変化を併せた食・農業・農村などに対する認識の変化」と定義している。本研究ではこれを参考に、「体験活動を行った結果、児童に生じた変化」として捉え、家畜の飼育・出荷・食べる体験活動の教育的効果として用いる。

## III 研究1 出荷前後の意識の変容

### 1 研究の方法

#### (1) 調査対象

新潟県上越市立X小学校5年1組20名(全員)

X小学校は、総合的な学習の時間(以下、総合)を中核にした教育課程を編成・実施している。調査当時、5学年では、「食べること・生きること」という年間テーマのもと、家畜として肉豚を飼育・出荷することを通して命について考える総合が実践された。また、X小学校では、児童が作文を書くことを大切に、「自分の考えや行動を振り返り、これからの自分の在り方を考えようとする」と定義する、内省的な思考が重視されている<sup>12)</sup>。そのため、教育的効果を探るにあたり、研究1では、話し合い後の作文の記述内容に着目し、レイニーの命に対する児童の意識の変容を考察した。

#### (2) 調査の視点

2016年の9月から11月にかけて行われたレイニーの出荷にかかわる話し合いを表1に整理した。研究1では、1回目から7回目の話し合いが行われた期間を調査期間とした。

表1 レイニーの出荷にかかわる話し合い

月/日	活動内容
9/6	出荷について1回目の話し合いを行う
10/13	出荷について2回目の話し合いを行う
10/19	出荷について3回目の話し合いを行う
10/26	出荷について4回目の話し合いを行う
10/27	出荷について5回目の話し合いを行う
11/7	レイニーを出荷し、6回目の話し合いを行う
11/15	レイニーの肉を食べ、7回目の話し合いを行う

#### (3) 分析の視点

山崎ら(2006)<sup>13)</sup>は、アンケート調査から、児童の生命観は学年が上がるにつれて多様化することや、「価値」「有限性」よりも「連続性」「感覚性」を意識するようになる傾向があることを明らかにしている。研究1は、一連の体験活動を通してどのような生命観をもつのかを明らかにすることを目的としているため、山崎らの示した児童の生命観カテゴリー(表2)を分析の視点として用いることとした。

表2 山崎らによる児童の生命観カテゴリー

生命観	内容
価値	命の大切さなど、命の価値を表す
有限性	命には限りがあるなど、命の有限性を表す
機能性	身体機能の働きを表す
関係性	親子や食物連鎖など、命の関係性を表す
連続性	命の連続したつながりを表す
感覚性	命の輝きなど、感覚的にとらえられた命を表す

## 2 結果

出荷前に行われた1回目から5回目の話し合いにおいて記述された作文を文字に起こし、児童の出荷に対する賛成・反対の立場を整理することで、全体の傾向を探った。その後、選定した抽出児の作文を意味内容で分け、山崎らの生命観カテゴリーを用いて、カテゴリーの出現率の変化から生命観を分析した。

### (1) 全体の傾向

出荷に対する児童の立場を、およそ継続して賛成する児童、およそ継続して反対する児童、賛成と反対の間で迷う児童の3つに分けた。1回目から5回目における人数の推移を図1に示した。賛成派は、4回目までは比較的少数派であるが、出荷することが決まった5回目に記述された作文では、7割の児童が出荷に賛成している。

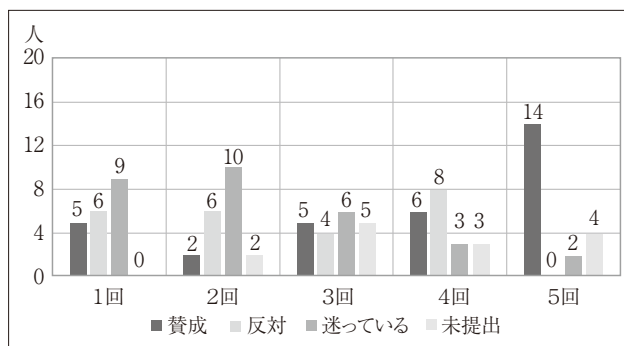


図1 出荷に対する立場の整理

### (2) 賛成派の児童

抽出児として、1回目の話し合いからおよそ継続して出荷に賛成していたA児・B児・C児を選定した。

#### ① 作文の記述内容

3名の抽出児が1回目の話し合いで書いた作文の中で、出荷に賛成する理由が述べられている部分を表3に抜粋した。

A児は、下線部i)「レイニーを飼うときから出荷すると思っていました」と、いずれ出荷することになるだろう、という意識で話し合いに臨んだものの、下線部ii)「出荷したらレイニーが死ぬ」という、出荷することでレイニーの命は終わってしまうという「有限性」にも気付き、下線部iii)「もっとよく考えてから出荷したい」と、今後の飼育や出荷に意欲を高めている。

同様にB児も、下線部iv)「今日の話し合いで、あらためて『殺すんだ』ということが分かりました」と、話し合いを通して命の「有限性」に着目している。同時に、出荷についてよく知らなかった自分を振り返り、下線部v)「レイニーの気持ちも含めて重みを感じました」と、レイニーの気持ちを押し量り、自分たちの選択や判断に対する責任の大きさを感じている。同様の手順で、2回目の話し合い以降の作文も生命観カテゴリーによって分析した。

表3 1回目の話し合いで書いた作文から抜粋

抽出児	記述内容の抜粋	カテゴリー
A児	i) <u>レイニーを飼うときから出荷する</u> と <u>思っていました</u> 。	i) 有限性
	ii) <u>出荷したらレイニーが死ぬ</u> から、 <u>出荷</u> することを、よく知らないのにそろそろ出荷だからやると思っていたから、	ii) 有限性
	iii) <u>もっとよく考えてから出荷したい</u> 。	iii) その他
B児	iv) <u>今日の話し合いで、あらためて『殺すんだ』ということが分かりました</u> 。今日、私は早い段階で、「出荷」を普通に言ってしまいました。レイニーの方からすれば「そんなによく分からないなら殺すな」と言っているかもしれません。	iv) 有限性
	v) <u>レイニーの気持ちも含めて重みを感じました</u> 。調べてみようと思いました。	v) 価値
C児	まだフン取りができていないから、やりきってから出荷したいけど、 <u>vi) しっかりとお世話を</u> して、 <u>出荷する日にちまで頑張り</u> たい。	vi) その他

#### ② 各カテゴリーの出現率

作文に現れた生命観カテゴリーの数が総記述数に占める割合を計算し、各カテゴリーの出現率の推移を図2に示した。賛成派の児童は、「価値」に関する記述が約30%から40%を推移していた。また、話し合いが進むにつれて「関係性」や「連続性」の記述も増える傾向にあり、生命観の多様化が見られた。

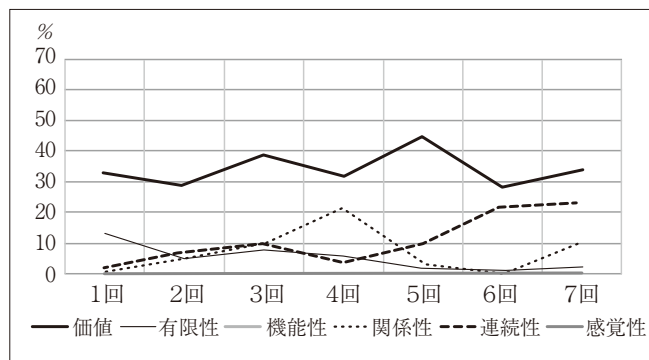


図2 賛成派のカテゴリー出現率

### (2) 反対派の児童

抽出児として、1回目の話し合いからおよそ継続して出荷に反対していたD児・E児・F児を選定した。

#### ① 作文の記述内容

3名の抽出児が1回目の話し合いで書いた作文の中で、出荷に反対する理由が述べられている部分を表4に抜粋した。

D児は、下線部vii)「今よく考えてみると、出荷するため＝殺すためだから、そんなだったら飼いたくなかった」と、出荷して命の大切さを学ぶためにレイニーを飼うと決めた自分を振り返り、下線部viii)「自分のためなら他の動物が犠牲になっていいって自分勝手だ」と、自分たちの都合でレイニーを出荷してはならないという命の「価値」に触れている。

E児も、下線部ix)「一番悲しむのはぼくたちよりレイニー」や、下線部x)「にじっ子の仲間なのに簡単に死なせたくないし、ぼくたちの親友でもある」のように、大切なレイニーとしての命の「価値」に着目し、「死なせたくない」と願っている。

同様の手順で、2回目の話合い以降の作文も生命観カテゴリーによって分析した。

## ② 各カテゴリーの出現率

作文に現れた生命観カテゴリーの数が総記述数に占める割合を計算し、各カテゴリーの出現率の推移を図3に示した。反対派の児童は、7回目の作文ではカテゴリーにばらつきが見られるものの、「価値」に関する記述が約40%から60%と、賛成派と比較すると高く推移していることから、反対派の児童がレイニーの命の「価値」にこだわる傾向があるといえる。

## (3) 考察

山崎らの生命観カテゴリーを用いて児童の作文を分析したことで、およそ継続して出荷に賛成していた児童は、命の「価値」に着目しつつも、話合いを重ねる中で、「関係性」や「連続性」の記述を増やし、生命観を多様にする傾向が見られた。一方で、およそ継続して出荷に反対していた児童は、レイニーの命の「価値」にこだわる傾向があった。

表4 1回目の話合いで書いた作文から抜粋

抽出児	記述内容の抜粋	カテゴリー
D児	vii) 今よく考えてみると、出荷するため＝殺すためだから、そんなだったら飼いたくなかったって思いました。自分たちでやるって決めただからって思うと、なんか私って、viii) 自分のためなら他の動物が犠牲になっていいって自分勝手だと思います。	vii) 価値 viii) 価値
	レイニーを簡単に死なせたくないし、まだ一緒にいたい。出荷になってix) 一番悲しむのはぼくたちよりレイニーです。x) にじっ子の仲間なのに簡単に死なせたくないし、ぼくたちの親友でもあるから、そんなにうれしいことじゃないと思いました。	ix) 価値 x) 価値
F児	xi) もともとは出荷して食べるために飼ったんだし、出荷をするまでは、命や食の大切さはあんまりわからないと思っていただけ、xii) 出荷＝殺すという意味で、思っていたより、ずっとひどいものだった。	xi) 有限性 xii) 有限性

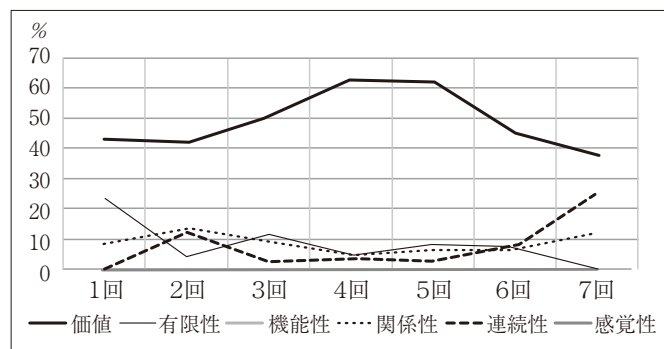


図3 反対派のカテゴリー出現率

## IV 研究2 活動終了後の意識の変容

### 1 研究の方法

#### (1) 調査対象

新潟県上越市立X小学校6年1組20名(全員)

5学年におけるレイニーの飼育・出荷・食べる体験活動を終え、6学年となった児童がレイニーの命についてどのように考えているのかを明らかにするために、研究1において調査対象とした児童20名を調査対象とした。

#### (2) 分析の視点

レイニーの出荷から約一年が経過した2017年9月に「レイニーの飼育を振り返り、レイニーの命について今思うこと」をテーマに作文を書いてもらった。その内容を、研究1で用いた山崎らの生命観カテゴリーによって分類した。

### 2 結果

回収した作文を文字に起こし、レイニーの飼育・出荷・食べる体験活動に意味を見いだしていると捉えた記述を整理した。その後、研究1と同様に抽出児の作文を意味内容で分け、山崎らの生命観カテゴリーを用いて分類し、各カテゴリーの出現率の変化を見た。これにより、出荷前後の期間から出荷の約一年後までの意識の変容を分析した。

(1) 全体の傾向

作文の記述内容から、レイニーの飼育・出荷・食べる体験活動に意味を見いだしていると捉えた記述の抜粋と、その延べ人数を整理した。表5に示したように、児童が一連の活動から、命のかけがえのなさや食べ物の大切さを学んだと振り返っていることが分かる。

表5 活動に意味を見いだしていると捉えた記述

記述	延べ人数
レイニーを忘れたくない	9
食べ物を残さないようにしたい	7
自分は命をもらいながら生きている	6
命はかけがえのないものである	5
レイニーの分まで精一杯生きたい	2
その他	3

(2) 賛成派の児童

① 作文の記述内容

3名の抽出児の作文の中で、レイニーの飼育・出荷・食べる体験活動に対して、意味を見いだしていると捉えた記述を表6に抜粋した。

A児は、下線部xiii)「レイニーを出荷するのは友達がいなくなるみたいで悲しかった」と命の「価値」を振り返っている。それでも、下線部xiv)「いつも体の中にレイニーや他の命がたくさんいることを忘れないようにしよう」と、レイニーの肉を食べたことで、レイニーを忘れないでいようとする「連続性」を意識している。

同様に、B児も、下線部xv)「かわいがっていた豚を殺すなんてふつうはありえないことだ」と、レイニーが出荷されたことは決して当たり前のことではないという命の「価値」を振り返っている。同時に、下線部xvi)「悲しいって思うのではなくて、生きる力になってくれただけでも、いいのかな」と、出荷を通してレイニーの命を自分が生きていくための力にしようとする「連続性」を感じていると捉えた。

また、C児は、下線部xvii)「食べ物を大切にしていこうことが大事」や、下線部xviii)「食べ物を食べるときにしっかり感謝をしないといけない」と、レイニーの飼育や出荷を通して、日常生活における自分の心構えについて語っていると捉えた。

表6 6学年になって書かれた作文から抜粋

抽出児	記述内容の抜粋	カテゴリ
A児	ぼくは、xiii)レイニーを出荷するのは友達がいなくなるみたいで悲しかったです。レイニーのお肉を食べたからxiv)いつも体の中にレイニーや他の命がたくさんいることを忘れないようにしようと思いました。	xiii) 価値 xiv) 連続性
B児	レイニーの命については、自分たちでxv)かわいがっていた豚を殺すなんてのはふつうはありえないことだけど(中略)、今は、しょうがないことだって思っています。xvi)悲しいって思うのではなくて、生きる力になってくれただけでも、いいのかなって思っています。	xv) 価値 xvi) 連続性
C児	ぼくは、xvii)食べ物を大切にしていこうことが大事だと思います。だから、xviii)食べ物を食べるときにしっかり感謝をしないといけないと思いました。	xvii) その他 xviii) その他

② 各カテゴリの出現率

出荷前後の全7回の話合いで書かれた作文における生命観カテゴリの出現率を示したグラフ(図2)に、一年後の作文における出現率を加えたものを図4とした。賛成派の児童は、「価値」に関する記述の出現率が25%であり、出荷前後に行われた1回目から7回目における出現率と比較しても大きな差は見られなかった。一方、「連続性」に関する記述は、出荷直後に行われた6回目の話合い以降に増える傾向があり、レイニーの出荷を経験して、児童がより一層、命の「連続性」を意識するようになり、それが継続していることが分かる。

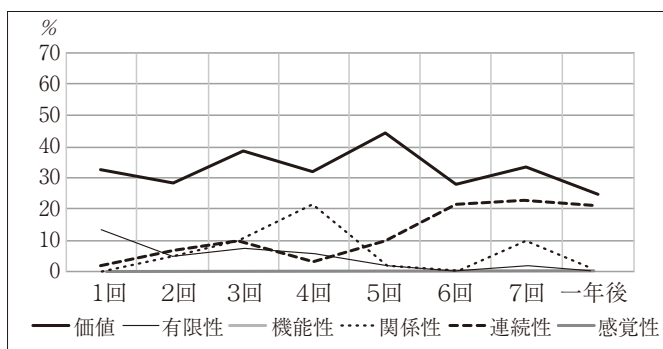


図4 賛成派のカテゴリ出現率

(3) 反対派の児童

① 作文の記述内容

3名の抽出児の作文の中で、レイニーの飼育・出荷・食べる体験活動に対して、意味を見いだしていると捉えた記述を表7に抜粋した。

D児は、レイニーを出荷したり肉を食べたりしたことを振り返り、下線部xix)「片方の気持ちでは、レイニーは私の体となり、栄養となってくれている」や、下線部xx)「レイニーの分までしっかり生きよう」と、レイニーの命を自分の命につないでいこうとする「連続性」を感じている。

その一方で、下線部xxi)「もう片方では、レイニーの命をうばって、私は生きてよかったのか」と、レイニーを仲間として大切に思う命の「価値」に関する記述も見られた。

F児は、下線部xxiv)「レイニーにはひどいことをしたと思う」と振り返りつつ、下線部xxv)「こうしないと私は生きていけません」と、家畜を食べることで自分は生きていけるという生き物と自分との「関係性」について触れている。一方で、感謝して手を合わせるだけではだめだと感じ、下線部xxvi)「これからずっと考える課題だ」と、学びを続けようとしていると捉えた。

表7 6学年になって書かれた作文から抜粋

抽出児	記述内容の抜粋	カテゴリー
D児	レイニーはこの私の中で生きている。xix)片方の気持ちでは、レイニーは私の体となり、栄養となってくれている。xx)レイニーの分までしっかり生きようと思っています。xxi)もう片方では、レイニーの命をうばって、私は生きてよかったのかと思っています。	xix)連続性 xx)連続性 xxi)価値
	xxii)レイニーはにじっ子の仲間だから、出荷することは、いやでした。けど、やっぱり今考えてみると、xxiii)やっぱり、ぼくの心の中にレイニーが生きているから、ぼくは、うれしいと思っています。	xxii)価値 xxiii)連続性
	xxiv)レイニーにはひどいことをしたと思うけど、xxv)こうしないと私は生きていけません。なので、せめて家でも「いただきます」「ごちそうさま」は必ず手を合わせるようにしました。それだけじゃだめだと思うから、xxvi)これからずっと考える課題だと思いました。	xxiv)価値 xxv)関係性  xxvi)連続性

② 各カテゴリーの出現率

出荷前後の全7回の話合いで書かれた作文における生命観カテゴリーの出現率を示したグラフ(図3)に、一年後の作文における出現率を加えたものを図5とした。反対派の児童は、「価値」に関する記述の出現率が約30%であり、出荷前に行われた1回目から5回目の話合いと比較すると大きく減少している。一方、「連続性」の記述は17%と、7回目の話合い以降に増える傾向があり、カテゴリーの多様化が見られた。

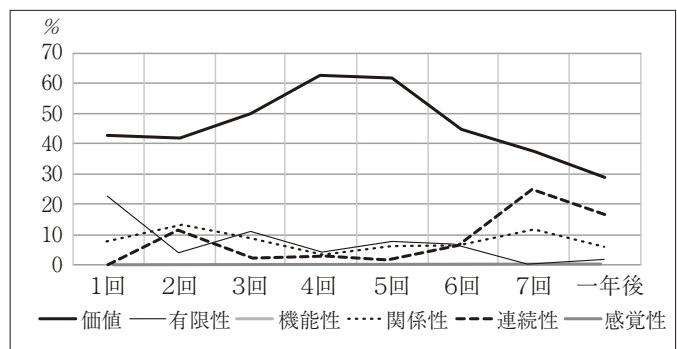


図5 反対派のカテゴリー出現率

3 考察

レイニーの飼育・出荷・食べる体験活動から約一年後に書かれた作文を分析したところ、出荷に賛成していた児童には、「連続性」に関する記述が増加する傾向があった。一方で、出荷に反対していた児童は、出荷前後で見られた「価値」へのこだわりが薄れ、カテゴリーが多様化する傾向が見られた。

V 研究3 反対派の意識の変容プロセス

1 研究の方法

(1) 調査対象

研究1において出荷前後の児童の意識を分析したところ、賛成派は生命観を多様にさせながら学ぶ傾向がある一方で、反対派は一貫して命の「価値」にこだわる傾向が見られた。しかし、研究2において活動終了から約一年後に書かれた作文における各カテゴリーの出現率を見たところ、反対派の生命観に多様化が見られたことで、賛成派と反対派の間に大きな差が見られなくなった。そこで、研究3では、反対派の児童が出荷についてどのように考え、レイニーの命についての考えを変容させていったのかを探ることとした。

(2) 調査方法

およそ継続して出荷に反対していたD児・E児・F児の3名に2017年10月11日から17日にかけて15分から30分間の半構造化インタビューを行った。内容は「出荷についての話合いが始まったときに考えたこと」「出荷することが決まったときに考えたこと」などである。インタビュー内容は、児童の承諾を得てICレコーダーやノートに記録し

た。なお、児童の心情に配慮し、担任とも相談の上、無理のないよう行った。

### (3) 分析の視点

研究3では、インタビューをもとにして意識モデルを構築するため、木下(2014)<sup>14)</sup>の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を用いた。また、少数事例も取り入れることができるように、西條(2014)<sup>15)</sup>のSCQRMの考え方も取り入れた。なお、分析テーマは「飼育した豚の命に対する意識の変容プロセス」と設定した。分析の手順は、以下の通りである。

- ア) インタビューの内容を文字に起こし、意味文節で分ける。
- イ) 分析ワークシートを作成し、概念を生成する。
- ウ) パラグラフの比較などを行いながら、概念の構造化を行う。
- エ) 分析ワークシートをもとに、モデル図を素描する。

表8 カテゴリーとカテゴリーに含まれる概念と定義

カテゴリー	概念名	定義
自分たちのレイニーだから命に責任を持ちたい	1 レイニーの命に責任を持ちたい	自分たちで飼うと決めたレイニーだから、人任せにせず最後まで見届けたいと思っている
	2 出荷することを自分なりに納得しようとする	今出荷しなければいずれ動物のえさとなるという事実や、自分たちでは飼えなくなる現実を考え、出荷するべきか迷っている
	3 食べることで責任を果たす	自分たちのレイニーだから出荷したら食べなければならないと感じている
自分たちの総合に対する疑問	1 出荷しなくても命の大切さは十分学べた	出荷しなくても得るものはあるし、飼育や話合いで命の大切さは学べたから、出荷はしなくてもよいだろうという思いがある
	2 出荷はレイニーの運命だと決めつけたくない	出荷はレイニーの意思でやったことではないから、家畜としての運命だからと割り切れない思いがある
	3 自分たちの学習のために命を使うことへの罪悪感	レイニーを自分たちの総合の実験台として使ってしまったのではないかと罪悪感がある
	4 出荷したことへの否定的な思い	出荷は必ずしなくてはならないことではないから、やってよかったとは思っていない
目的を忘れてレイニーとの楽しい時間を過ごす	1 飼育に没頭する	育てていくうちに、レイニーを飼った目的を考えないようになる
	2 目的を忘れて飼育する	出荷するかしないかの話合いが始まり、レイニーを飼った目的を思い出している
	3 飼育することのよさ	日常の飼育にやりがいや楽しさを感じている
	4 飼育することの大変さ	日常の飼育に大変さを感じている
レイニーの命を自分の命につないでいく	1 レイニーは今も自分の心の中にいる	レイニーを食べてエネルギーにしたので、今も自分の心の中にと感じている
	2 レイニーの分まで精一杯生きたい	レイニーを食べたことで、レイニーが自分を生かしてくれたと感じている
	3 命は答えのないことだから、考え続けなければならない	食べて「おいしかった」で、学びが終わるのではないと感じている
レイニーは食べ物ではない	1 レイニーを食べたことへの後悔	レイニーを食べないほうがよかったかもしれないという気持ちが大きくなる
	2 肉とレイニーが結びつかない	肉を見ても、これが生きていたレイニーだという実感がわかないでいる

## 2 結果

分析の結果、表8に示した16個の概念と5個のカテゴリーを生成し、図6に児童の意識モデルを示した。なお、〈 〉は概念、【 】はカテゴリーである。

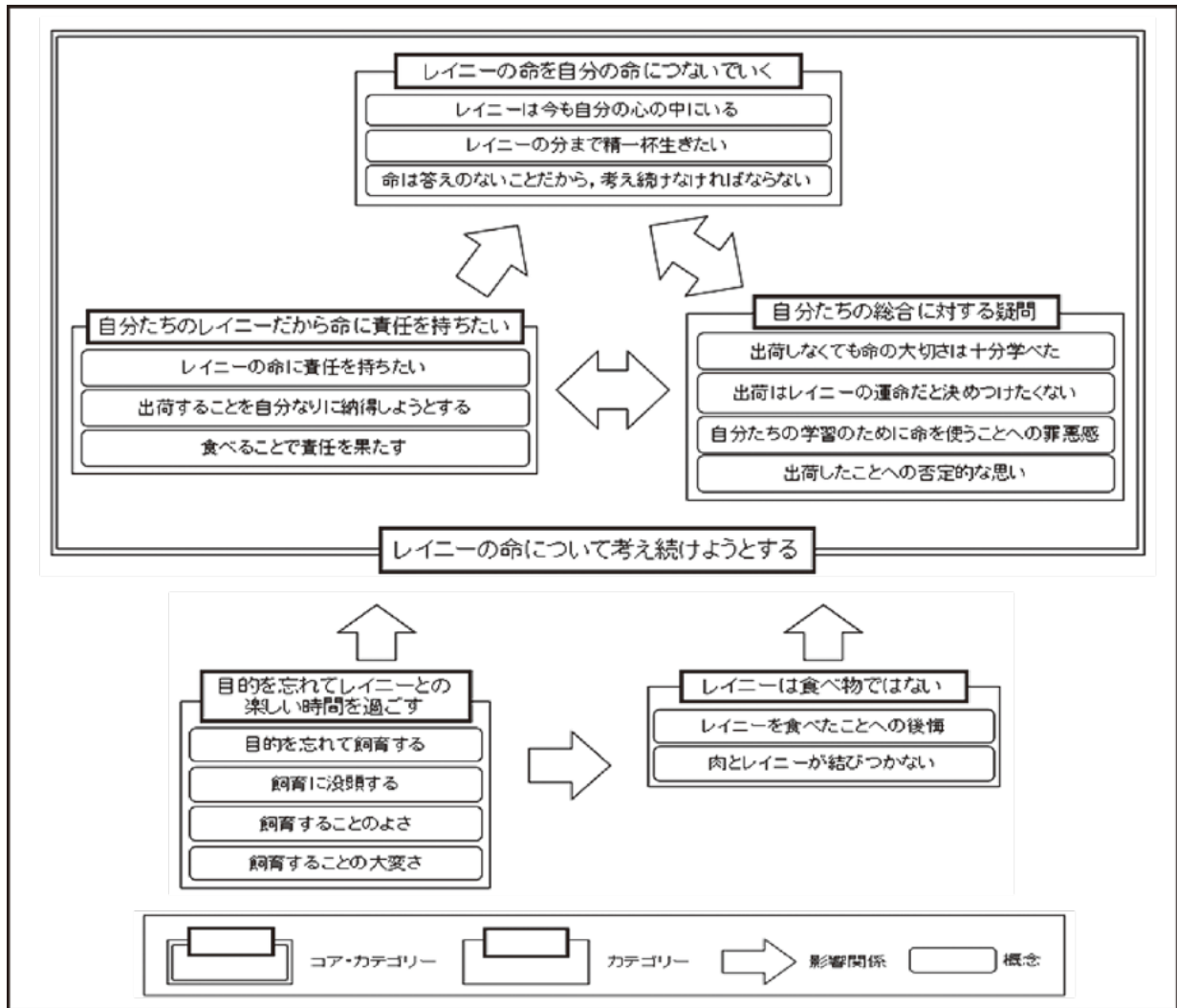


図6 飼育した豚の命に対する意識モデル

### 3 考察

図6をもとに考察を述べる。レイニーの命の「価値」にこだわり、出荷に反対していた児童は、出荷して命の大切さを学ぶという【目的を忘れてレイニーとの楽しい時間を過ごす】。出荷するかしないかについて話し合う中で、児童は＜出荷しなくても命の大切さは十分学べた＞と感じ、出荷はレイニーの意思ではないため、家畜としての運命だと割り切れないでいる。一方、時期を逃した出荷では、肉は動物の餌として使われるという事実や、レイニーが一生を終えるまで飼いつけていくことは難しいという現実にも目を向け、＜出荷することを自分なりに納得しようとする＞迷いを見せる。そして、最後まで見届けて＜レイニーの命に責任を持ちたい＞という思いから出荷するも、レイニーを実験台にしてしまったのではないかという＜自分たちの学習のために命を使うことへの罪悪感＞を覚えたり＜出荷したことへの否定的な思い＞などの【自分たちの総合に対する疑問】をもったりする。児童は、＜食べることで責任を果たす＞との思いからレイニーの肉を食べる。そして、＜レイニーは今も自分の心の中にいる＞や、＜レイニーの分まで精一杯生きたい＞と感じたりするなど、出荷を経験したからこそ＜命には答えがない＞と感じ、【レイニーの命を自分の命につないでいく】という思いをもつ。その一方で、「レイニーを食べないほうがよかった」と後悔する【レイニーは食べ物ではない】という思いもあり、今も【自分たちの総合に対する疑問】を感じている。児童はこうした葛藤を自覚しながら、活動が終わった後もレイニーの命について考え続けようとしている。レイニーの命についての児童の意識の中核に今もこうした意識があると考え、コア・カテゴリーを【レイニーの命について考え続けようとする】とした。



## VI 全体考察

研究1と研究2において、児童の作文の記述内容を生命観カテゴリーを用いて分析したことで、およそ継続して出荷に賛成していた児童は、話し合いを重ねる中で生命観を多様にしながら学ぶ傾向があった。一方で、およそ継続して出荷に反対していた児童は、出荷前後において、レイニーの命の「価値」にこだわる傾向があったが、肉を見たり食べたりしたことで命の「連続性」も感じ、生命観の多様化が見られた。そして、研究3において、出荷に反対していた児童を対象に実施したインタビューでは、児童が一連の活動を通して、レイニーの命を自分の命につなげて捉えようとする一方で、自分たちの学習に家畜の命を使うということに対して疑問をもち、これからもレイニーの命について考え続けようとしていることも明らかになった。つまり、出荷前後において、生命観を多様にしながら学んでいた児童も、レイニーの命の価値に強くこだわっていた児童も、一連の活動を通して自分らしい生命観をつくっていたと考えられる。出荷について考える中で、年間テーマである「食べること・生きること」について探り、活動が終了しても自分の生き方について考え続けようとしている。こうした教育的効果の背景には、総合を中核とした教育課程において、5学年の児童がレイニーと継続的にかかわっていたことがあった。総合での飼育や話し合いの場だけでなく、レイニーを中心とした学校生活の中で、児童はじっくりと話し合い、自分の考えをつくっていた。その過程において、出荷や肉を食べることを経験したことで、児童はレイニーの命について深く考え、意識を変容させていったと考える。

## VII 課題

本研究では、飼育した家畜の命に対する意識の変容について、レイニーの出荷前後における児童の意識と、出荷から約1年後の意識をもとに考察した。今後、レイニーの飼育・出荷・食べる体験活動を実施した教師への意識調査や、話し合いにおける手立ての整理なども併せて行うことで、一連の活動の教育的効果をより一層明らかにできると考える。

## 引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」, 2016, p.7
- 2) 独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書」, 2010
- 3) 文部科学省「平成14年度文部科学省白書 新しい時代の学校～進む初等中等教育改革～」, 国立教育政策研究所, 2002, p.27
- 4) 中川美穂子「獣医師からみた学校飼育動物の意義(動物介在教育)」, 『学校飼育動物と生命尊重の指導 学校で動物を飼う意義と適切な管理について再考する』, 教育開発研究所, 2001, pp.42-45
- 5) 立川奏枝・田中理絵「小学校教育における動物飼育といのちの教育」, 山口大学研究論叢, 第59巻, 第3部, 2005, p.197
- 6) 中川美穂子「小学校での動物飼育の意義と獣医師による飼育支援」, 生物教育, 日本生物教育学会, 第43巻, 第3号, 2002, p.144
- 7) 多田納育子「児童の生命観の発達に関する研究」, 生物教育, 日本生物教育学会, 第32巻, 第4号, 1992, p.261
- 8) 鳥山敏子『生と性と死の授業 いのちに触れる』, 太郎次郎社, 1985, p.18
- 9) 村井淳志『「いのち」を食べる私たち鶏を殺して食べる授業-「死」からの隔離を解く-』, 教育史料出版会, 2001
- 10) 立川奏枝・田中理絵「小学校教育における動物飼育といのちの教育」, 山口大学研究論叢, 第59巻, 第3部, 2005, pp.199-201
- 11) 山本徳司「農作業体験学習の前後における子供の意識変化について」, 農村生活研究, 日本農村生活学会, 第135号, 2008, pp.30-41
- 12) 新潟県上越市立大手町小学校『Let's go to the Next Stage [ネクストステージ』, 2017, p.27
- 13) 山崎高志・関祐一・清水保徳・井熊理恵・和井内良樹・前田良子・星野典靖・河野義章「子どもの意識に根ざした道徳指導方法の開発・改善 生命尊重を中心に」, 東京学芸大学附属学校研究紀要, 第33集, pp.21-39
- 14) 木下康二『ライブ講義M-GTA -実践的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて-』, 弘文堂, 2014
- 15) 西條剛央『ライブ講義・質的研究とは何か SCQRMベーシック編-研究の着想からデータ収集, 分析, モデル構築まで-』, 新曜社, 2014

# Educational Effect of Experiential Activities of Raising, Shipping, and Eating Livestock: Changes in Children's Longitudinal Awareness for Integrated Studies

Fukiko YOSHIKAWA\* · Chizuko MATSUI\*\*

## ABSTRACT

According to changes in children's longitudinal awareness for integrated studies, this case study explored the educational effect of the experiential activities of raising, shipping, and eating livestock. According to Yamazaki et al.'s categories of sense of life, the first study analyzes compositions written before and after livestock shipment. Using the same categories, the second study analyzes compositions written about one year after shipping, to investigate any change in the children's awareness. Children who agreed with shipping tended to make a variety of senses of life while talking over and over. Children who opposed shipping tended to be particular about "the value" of livestock's life before and after shipment. But these children tended to make a variety of senses of life about one year after shipping. In the third study, the content of interviews about one year after shipping, with children who opposed it, were analyzed with the "modified grounded theory approach." Results formed five categories: (1), "Because Rainy is our pig, I want to take responsibility for its life"; (2), "questions about our periods for integrated studies"; (3), "to forget the purpose and to have a good time with Rainy"; (4), "to sustain the life of Rainy with my life"; and (5), "Rainy is not food." By reflecting on the shipping, children made their sense of life more selfish, and they continued to think about their lifestyle long after the activity.